遊泳禁止

売国有罪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊泳禁止

【Ｎコード】
Ｎ１８２４Ｆ

【作者名】
売国有罪

【あらすじ】
保健所の仕事で私はとある湖を訪れた

「あなたを保護しに来ました」
そう告げるたびに私や私の仲間達は摩耗していくのだ。
水面から顔を半分だけ出して外の世界を伺う少女は、しかし純粋に世界を捉えていた。ように見えた。汚れがないとか、純粋であるとか、多分それすらも追いつけないところに彼女は存在しているのだろう。そんな予感が全身から香気となって発せられているのだ。
だが、私はその世界を破壊しなければならない。
秩序のため、職のため、未来のため。後付けの理由で、保健所の職員として。
「あなたはこのままでは長くは持ちません。その水は、汚れているのです。私たちならばもっと綺麗な――純粋な暮らしを約束します」
見え透いた甘言を並べる。もし、彼女がこちらの問いかけに応じても、私は彼女たちがその後どうなるかを知らない。
ぱしゃ、と。
肩まで水面から上に出したかと思うと、少女は鱗を纏った足――鰭を一瞬だけ水面近くまで持ち上げ、沈んだ。それだけで答えは明確だった。
帰るわけにはいかない。
秩序のため、職のため、未来のため。そして、保健所の職員として。何度もやって来たことの繰り返しだ。
バックパックから旧式のドライスーツを取り出して、その半分廃棄物のような袖に腕を通す。妙に締め付けが強く、血の巡りが悪くなる。仕事だ、と言い聞かせてもやはり苦手な物は苦手だ。
シュノーケルなどという前時代的な呼吸道具を口にくわえ、水に浸かる。冷たい。首まで浸かる頃にはドライスーツの中いっぱいに水は満たされ、満たされた水は、体温により温度を少しずつ上げていった。

ゴーグルなど無意味に思える暗い水面の下に、わずかに光る物を捉えた。光が水の下深くにまで届くことが私にとって驚きであったが、その光は彼女自身の物であるということに次の瞬間には思い至った。

潜るまでの一瞬、あれは疑似餌ではないかと思った。

水の重圧が頭を包み、シュノーケルからの酸素補給は絶たれる。肌が露出している部分が刺すように冷たい。事実、この汚染された水で、肌を露出することなど剣山の上で寝ころぶに等しいのだろう。

摩耗していく。

足ひれが水を押しのけて水底に向かうにつれ、先輩の顔が浮かぶ。

私に保健所がなんたるところか教えてくれたあの男は、もういない。水のそこに沈み、誰の助けもないまま一生を終えたのだろう。今、私が潜っている水の底で。

摩耗したなんてことを言うからだろうか……

太陽の光はもうほとんど届いていない。いや、届いている方がおかしいのだが、視界は辛うじて保たれている。深海に潜ると人はある地点から物が灰色に見えると聞いた。それは、人が感知できる光の範囲が乏しくなるからしい。ここは深海でもなければ海でもないのだが、普通なら水の汚れでこの辺りから大体何も見えなくなるのに、だ。

疑似餌。

また、水面での考えが浮かぶ。先輩もこれに導かれて死んだのだろうか。しかし、選択肢はいつも一つで、選ぶ選ばないにかかわらず結末は一つだ。

思考が乱れる。危ない。

目の前に光る物が、軌跡を描いた。

追いかける、

引き返す。

もちろん追うに決まっている。秩序のため、職のため、未来のため。心を落ち着けろ。水面はあんなにも凪いでいたじゃないか。
追いつけそうで追いつけないスピードを保ち、光は目の前を進んでいく。どちらにせよ、これ以上スピードを出しては後が持たないから、私はこのスピードを保つだけなのだが。
光がぼう、と淡く照らし出す所によると、どうやらここは水中洞窟の中らしい。まんまと疑似餌に釣られたわけか。だが不安はない。
先導する光が急に速度をゆるめる。光は徐々に近づき、ついには私と並泳する形になる。　隣を見ると、潜る前に問いかけた少女の姿があった。かすかに笑っているようだ。愚か者だと、嘲っているのかもしれない。
不意に少女の細い腕が私の頭を包み込んだ。これが、最後か。先輩の顔が浮かぶ。なぜ、彼は私を置いて一人で潜ったのだろう。ふと、疑問が気泡と共に浮上した。

「　　」

聞こえるはずなど無い。水の中だからか？　分からない。気泡が上っていくのが見えた。混乱？　落ち着け。
意識が遠くなる。いや、遠くなることを理解できること程度には大丈夫なのかもしれない。なに、少し視界が白くなってきているだけだ。まだいける。本当にそうか？
目の前が光に満ちる。洞窟を抜けたのか？
暖かい。
光の中で、美しい人魚達が泳いでいる姿が見えた。何十匹――いや、人か――の人魚が水面から注ぐ光の中、何かを中心に泳いでいる。
遊泳の中心にあるそれは、私に見えた。ボロボロのドライスーツを着た、私だ。
だが、中身がなかった。

あるはずの腕や、足。あるべき所に頭もなく、ただそこに人がいるようにドライスーツは膨らんでいる。　何だ？
ああ、そうか。
白が世界を本格的に縁取り始めた。
多分、人魚達はここで静かに暮らしているのだ。人の清浄な水よりも、自然に作られたこの清浄な空間で。
だったらなぜあの汚い水の所へ？
彼女たちには男が、

＊

『あなたを保護しに来ました』
先輩の通信はここで途絶えていた。暗い水面に入る直前だった。当初の手はずではここでキャンプして僕たち後発隊と合流し、浄水する予定だった。先発隊の任務は汚染レベルの測定と、近隣住民の避難だけだ。
そうだ、先発隊のメンバーは？
バックパックと脱ぎ捨てられた服。バックパックの中身は、ここに至るまでの三日の間に食べたと思われる携帯食料の箱と、なぜか一枚だけ入っていた薄く、光にかざすと七色に光る鱗だった。
ぱしゃり、と。
猛毒の水がはねる音を背中に聞いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1824f/

遊泳禁止

2010年10月8日15時33分発行